公開講演会「基礎科学が拓く未来社会－東大理学部からのメッセージ」の開催

研究科長　佐藤　勝彦

さる4月19日（金）、理学系研究科の新たな企画として上記の公開講演会が安田講堂で開催されました。言うまでもなく理学系研究科・理学部（以後理学系研究科と記す）は明治10年の創設以来、わが国の基礎科学の研究において、またその高等教育において中心的役割を果たしてきました。しかし、理学系研究科は、自らの研究成果を一般市民、国民に伝える努力をこれまでもしてまいりましたが、研究活動の努力・成果の高さに比べると必ずしも十分であったとはいえません。今年度より、さらに基礎科学の重要さと面白さを、また研究科の研究成果を直接市民や若い学生に伝えるために、定期的に公開講演会を開催することにしました。第一回の講演会ということで、佐々木毅総長、遠山敦子文部科学大臣にご挨拶をお願いいたしました。佐々木総長は基礎科学研究の重要さと東京大学の中での理学系研究科の果たしてきた重要な役割について、また今後の役割について期待を述べていただきました。また遠山大臣は国の施策として基礎科学の振興がいかに重要であるか、さらに具体的に進めている政策についてお話いただきました。遠山大臣は、一般的な挨拶を超えてニュートンの言葉も引用するなどしながら自らの言葉で熱っぽく基礎科学の重要性を語っていただき、研究の現場にいるものとしては大変感銘を受けました。

このあと日本学士院院長長倉三郎先生に、長い研究生活と日本の学術政策に携わってこられた経験を踏まえ「基礎研究の流れと社会 ― 複眼的視点を中心に ―」と題して招待講演をおこなっていただきました。ギリシャ哲学から近代科学の成立にいたる科学史からはじまり、広い視野から基礎科学と社会のあり方について格調高く語っていただきました。

この後、理学系研究科の研究者3名（佐藤勝彦（物理学専攻）、黒岩常祥（生物科学専攻）、山形俊男（地球惑星科学専攻））がそれぞれの専門について自らの研究成果を含め最近の進展を聴衆に熱っぽく語りました。最後の締めとして、日本未来科学館長　毛利衛氏に「宇宙から見た科学」と題して招待講演をお願いい致しました。宇宙飛行士としてスペースシャトルに搭乗した体験、またその体験に基づいた生命感、地球感・科学感について聴衆と対話しながらお話いただきました。

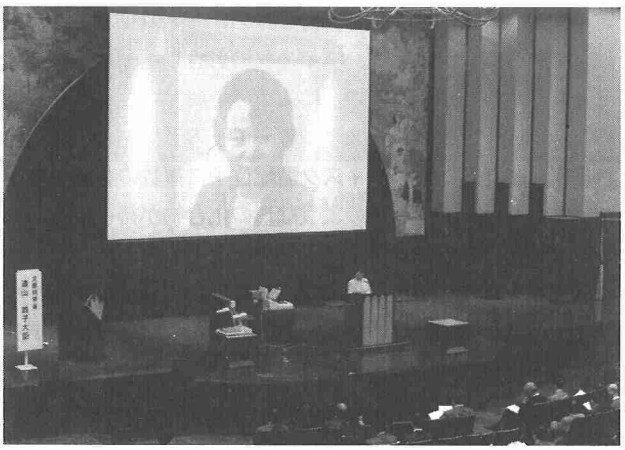
今回の公開講演会にはおよそ800人の方々が参加しました。第一回ということで、いくらか盛りだくさんな内容となりましたがほとんどの聴衆が満足していただくことのできる公開講演会となりました。参加者へのアンケート調査の仔細はホームページをご覧ください。

http://www.s.u-tokyo.ac.jp/event/public-lecture/syuukei.html

今回の公開講演会の成功は、講演会の実行委員会委員長で司会を勤められた岩澤康裕先生、実行委員会、将来計画委員会、広報委員会の先生方、また理学系研究科中央事務の皆様の努力によるものです。あわせてご協力いただきました学生・院生のも皆さんにも感謝申し上げます。

今回の公開講演会の当日、午後1時から5時まで、第1回の理学系研究科諮問委員会が開催され、また講演会の終了後、研究科の活動を社会に伝えるため午後10時半まで記者会見も行なわれました。国立大学の法人化に代表されるように、今大学の枠組みが大きく変わろうとしております。直接的社会への寄与、還元を求める風潮の強まる時代にあって、理学系研究科は基礎科学の教育と研究が重要であることを積極的に広く訴えて行かなければなりません。理学系研究科はこの流れを受身的に対応するのではなく、むしろ積極的に受けとめ、さらに基礎科学の教育・研究活動を強める改革を進めようとしております。この4月に理学系研究科・理学部憲章を制定しましたが、学内においても積極的に改革をすすめるため自ら憲章を定めた部局は理学系研究科が最初でしょう。諮問委員会は理学系研究科の将来について、先輩や学界からのみならずマスコミ・産業界など社会から広く助言を受けるために設けられたものですが、同時に理学系研究科の社会への説明責任にも寄与しています。記者会見、またそれに基づいて書かれた新聞記事などでは、この理学系研究科の改革、積極的社会への発信の努力は高く評価されています。

現在、広報委員会が主体となって、第2回の公開講演会を年内に開催すべく準備が進められております。第一回の経験を生かしつつ、新たな試みも取り入れ多くの市民に満足していただける公開講演会となるよう期待しております。



公開講演会での遠山敦子文部科学大臣の挨拶